

---

# 伊予夏樹の靈現譚～木靈は語る～

渋江照彦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伊予夏樹の靈現譚／木靈は語る／

### 【NNコード】

N9981Z

### 【作者名】

渋江照彦

### 【あらすじ】

クリスマス。僕は恋人の伊予夏樹と共にD大学の今出川キャンパスのツリーを見にやつて来るのだが、其処で奇妙な物を見てしまう

……。

## プロローグ

クリスマス。

今出川にあるD大学のキャンパス内には、大きなクリスマスツリーが出現していた。

「わあ、大きなツリー！」

青色の電飾に彩られたツリーを見ながら、夏樹が無邪気に歎声を上げる。

「愛媛にはこんなツリーは無いの？」

僕は目を輝かせながらツリーに見入っている夏樹の顔を繁々と見つめながらそう答えた。

「え、愛媛ですか？」

「うん。何か蜜柑ツリーとかありますけど……」

「そんなのありません」

下らない冗談を瞬時に一蹴されると色々と傷つく。

「愛媛にもツリーはありますけど、こんな綺麗なツリーは初めて見ました」

「へえ、そうなんだ」

こんなのはツリーでもなんでも無いと去年豪語していたサークルの会長の顔が頭に浮かんだが、直ぐにその影を振り払つて、僕も今一度今年で二度目になる巨大なツリーをゆっくりと見物する事にした。

周りでは沢山の人々がワイワイ言いながら、パシャパシャと携帯カメラで青く点滅しているツリーを撮影する音が聞こえている。チラリと周りを見回すと、若いカップルも確かに沢山居るが、家族連れや老夫婦の姿も見えて何とも微笑ましい。

周りは和やかなムードに包まれ、真横では可愛い夏樹が目を輝かせながらツリーに見入っている……。

去年の今頃までは考えもしなかつたパライゾの様な状況だ。

ああ、僕って幸せ者だな……。

そう考えると自然と笑みが毀れてしまう。

ニヤニヤ顔のまま、僕は暫くぼんやりとツリーの方を見つめていたが、その内にフツとある物が目に飛び込んで来た。青白く光るツリーの木の上から何やら大きな影がぶら下がつてるのが見えたのだ。

一瞬僕はそれを大きなリュックサックか何かだと思つた。木の上にリュックサックがぶら下がつている様に見えたのだ。唯、よくよく考えてみればそんなツリーの木にリュックサックが置いてある訳も無い。

そう思い直してもう一度その物体を凝視して、僕は思わずアッと小さく叫んでいた。

それはリュックサックなどでは無かつた。

人だつたのだ。

男か女かは判らなかつたが、髪の長い人間が太い縄を首に巻いてブランブランと木からぶら下がつっていたのだ。

「う、嘘だろ……」

僕は思わずそう呟いていた。

「え、どうしたんですか？」

その声を聞きつけて、夏樹が真横から訊ねた。

その夏樹の声に、僕は弾かれた様に彼女の方を向いた。

「先輩、どうしたんですか？顔……凄い青いですよ？」

僕の顔がそんなに物凄かつたのか、夏樹は恐る恐るといった感じでもう一度訊ねた。

「え、いや、だつて……」

僕はそう言って、もう一度さつき人影がぶら下がつていた位置へと視線を向けた。

だが。

其処には既に何もぶら下がつてはいなかつた。

「本当に、大丈夫ですか？風邪とかじゃないですよね？」

夏樹が今にも泣きだしそうな顔をしながら僕の身体にじめゅつと抱きついていた。

「どうやら温めてあげようと思つてくれたらしき。

「うん。いや、僕の見間違いだったよ。何でも無いから大丈夫

夫」

僕はそう言つてポンと夏樹の頭に手を当ててやつたのだが、先程見た人の人影が余りに生々しくて、背中を冷や汗が伝うのをビうする事も出来ずにいた。

## プロローグ（後書き）

初めての連載型の小説になりそうです。僕は基本的に短編しか書かない人間なのですが、ちょっと今回は頑張って書いていけたらなと思っています。内容がどうなるかは僕自身予測出来ませんが、どうぞ宜しくお願ひ致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9981z/>

---

伊予夏樹の靈現譚～木靈は語る～

2011年12月30日22時45分発行